

## 高校生が先生にSNSを教える画期的な取組 ～高校生が求めるSNSに対する教員の姿勢とは～

神奈川県立鶴見高等学校教頭 柴田 功

### 1. はじめに

私は平成16～28年度の12年間にわたって、神奈川県で情報教育の指導主事を務めておりました。ここで紹介する「高校生によるSNS講座」の取組は、私が神奈川県教育委員会に所属していた平成26、27年度の実践です。この取組の成果を少しでも広めたいという思いから、担当者の一人として、この場を借りてその実践を紹介することとしました。

### 2. 教員のSNS利用の実態

私はこれまで多くの情報科の先生方と接する機会がありましたが、こんなつぶやきをよく聞くことがありました。「SNSは使っていないけど、仕組みを知っているのでもって十分。」「SNSは使っていないけど、仕組みを知っているから私は情報モラルを十分教えられる。」「SNSのアカウントは持っていますが、特に発信するものがないので見るだけです」。



そのような先生方を、高校生はどのように見ているのでしょうか。それを先生方に伝えたいという考えからすべては始まりました。

一方で、生徒の思いは、このようなものでした。「先生たちもSNSに興味を持って、できれば使っ

てほしい」「SNSの問題について相談できる身近な大人であってほしい」「先生自らが情報社会を生き抜き、積極的に参画している姿を見せてほしい」。

仕組みを知っている、アカウントを持っている、というだけでは、生徒の立場から見ると物足りなく思われています。これが生徒の生の声でした。

### 3. 高校生が先生にSNSを教えたい提案

「高校生によるSNS講座」を開催するきっかけは、神奈川県で毎年行われている「ハイスクール議会」という模擬議会で行われた熱い議論でした。ハイスクール議会では神奈川県内の高校生が、教育に限らず、少子化問題や経済問題など幅広い課題について分科会を設け、議論をしていきます。



かながわハイスクール議会の様子

その分科会の1つに情報社会について議論する委員会があり、生徒から次のような発言がありました。「うちの学校の先生はSNSを全然知らない」「この間は先生に、『Twitterって何よ』と言われてしまった」「現在、高校生を取り巻くSNSでは本当に様々な課題があるのに、先生方は全然関心がないので相談もできない。ある程度は用語も知

っていてほしいし、便利さや面白さ、時には感動も分かち合えるツールであることや、今の社会では切っても切れない存在なのだということを知った上で、先生には相談に乗ってほしい」などと言っていました。特に一番問題と感じられていたのは、トラブルがあった時の、先生のこのような発言です。「じゃあSNSを使わなきゃいいじゃないか」。しかし、今の社会の中で、それはもう選択肢としてあり得ません。子どもたちにそういう社会を作ったのはわれわれ大人ですから、「じゃあやめれば」という言葉は、高校生にとっては本当に残念に聞こえているようです。

そこで、次のような政策提言が高校生からなされたのです。「私たちが先生たちよりもSNSに詳しいなら、私たちが講師になってSNSの研修会を立ち上げたい」。この提案を受けて、年度途中の、しかも高校生からの提案であったにも関わらず、神奈川県教育委員会は高校生によるSNS講座を立ち上げることになり、講師となるSNSに詳しい生徒を募集しました。



講師役に名乗りを挙げてくれた高校生たち

#### 4. SNS講座の講師を希望する高校生が結集

講師に名乗りをあげてくれた高校生は、公立・私立、男女も学年も興味の分野も様々で、22人と当初の想定より少々多めでした。生徒の中には、Twitterのフォロワーが何千人もいるというような子もいれば、学校としてSNSが禁止されていることに対する不満がある子もおり、背景にあるものは様々でした。

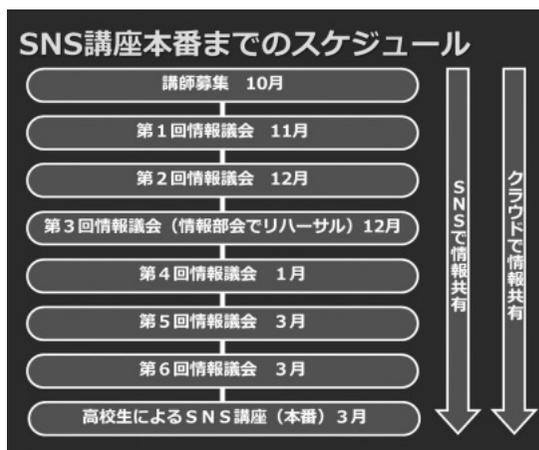
講座の実施に向けた準備を行うにしても、平日はそれぞれの学校の授業がありますし、学校もば

らばらなので、土日に6回集まりました。中でも一番苦しかったことは、神奈川県の情報科の教員向け研究会でSNS講座のリハーサルを行った時でした。「高校生が調べ物をした発表会のレベルで、教師向けの研修会の内容にはなっていない」と言われてしまったのです。そこからは大きく方向性を変えて、先生に何を一番伝えたいのかということゼロから考え直しました。



その結果、講義中心ではなく実習やグループ協議を中心にし、生徒の身の回りに起こっていることを先生方に実際に体験してもらうことにしました。

#### 5. 高校生によるSNS講座の実施

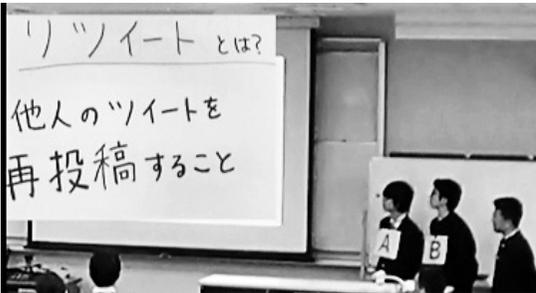


ようやく講座の準備ができ、いよいよ3月に神奈川県立総合教育センターの会場で、半日の講座を開催しました。小・中・高・特別支援学校の先生が約50名近く集まりました。その後、平成28年

3月にも同様の研修会を実施しましたが、同じくらいの人数が参加しています。

50名の受講者に対し、約20名の高校生が講師を務めましたから、非常に手厚い講座です。

Twitterを利用する教員が少ないという印象を持っていたので、講義では、Twitterは基本的に楽しいことを共有するツールなのだということを例示しつつ、ではそんな中でトラブルが発生するポイントはどこなのかということのを寸劇形式で紹介しました。



高校生の中でもTwitterの危険度の認識の差はまちまちです。寸劇の中では、顔写真を丸々載せてしまうくらい認識の甘い子、写真は載せずただ文章だけを投稿するような認識がとても厳しい子、その2人の中間くらいの子という役割分担をして、それぞれのツイート例を比較します。寸劇で取り上げたようなことは高校生の日常に非常に頻繁にあるものですが、こういう状況で、やはり使っていたツール（Twitter）を知らない先生を相談相手に選ぶにくいという生徒の意見でした。



実習ではLINEの「グループトーク」の機能を使った「グループ外し」を体験し、その時どんな気持ちになるか実感してもらいました。LINEをインストールしたタブレットを20台用意し、先生

数人に1台のタブレットをあてがいます。その20台でLINEのグループを作成しますが、その中の1台を、トークの途中でLINEのグループから意図的に外します。外されている間にも進んでいく全体のトークは前方のスライドで写し出します。グループから外された1台を使用していた先生方はどう思ったのか。それが高校生だったらどう思うのかというのを、実際に体験してもらいました。先生方からは、「やはり腹が立つ」という感想が得られました。

講義の中で、特に感動したのは、講師役の高校生が講座の中で話してくれた次の言葉でした。

「私たちにとって先生方は、1日の多くの時間を同じ場所で生活している、とても身近な『大人』です。これから先、今までよりもっと相談しやすく、困ったとき、悩んだときに頼ることができる関係になることを望みます」。何が私の心に響いたかということ、先生方に感謝の気持ちやリスペクトがある、その上で、もっとこうなってほしいという希望が語られたことでした。



講座終了後に先生方に取ったアンケートの中でも、この点についての評価が高く、高校生の生の声が具体的に聞けたと非常に好評でした。

一方、中には少し残念なアンケート結果もありました。それは、「SNSが大前提、すべてがその上で語られていると、とても違和感を覚えます。歩み寄りが双方に必要でしょう」というコメントでした。アンケートに書く意見は自由なのですが、ここがそもそもの課題なので講座を開くことになったのです。すでに社会の情報化が進んでいる中で、情報を使わない人たちに高校生が歩み寄りなさいというよりも、やはり大人がそこをどん

どん理解していくということが、本当に大事なのだと思います。

## 6. この講座でもっとも伝えたかったこと

この講座を担当した高校生がもっとも伝えたかったことは次の通りです。

「SNSというものは、私たちにとってもはや生活から切っても切り離せないものになっています。講座を2年間試してみても感じたことですが、生徒と先生、お互いに認識の差があるというのは、もう仕方のないことだと思います。その上で先生方に望みたいのは、その差に関して否定的にならず、もっとどんどん使ってみて、私たちと同じような使い方をしてほしいということです。正直な言い方をしまえば、情報科の先生に限らず、生徒指導の先生を含めた普通の先生方でも、もう「使ったり、知識があるのは当たり前」といった状況になってくれば、私たちも相談しやすいです。そんな身近な存在になっていただきたいと思っています」。

## 7. 教員に求められるSNSに対する姿勢

こうした取組を通して、講師となった生徒たちは教員のSNS利用のルーブリックも作成しました。

段階	到達レベル（評価基準）
S	SNSを上手に使いこなし、生徒のSNS利用について、適切な助言ができる。 <small>情報科の教員の目標</small>
A	SNSをある程度利用しており、生徒のSNS利用について、相談に乗ることができる。
B	SNSを利用したことがあり、生徒のSNS利用について、ある程度相談に乗ることができる。 <small>情報科以外の教員の目標</small>
C	SNSを利用したことがない。興味が無い。

つまり、SNSに対して大人にどうあってほしいかということを示したのですが、特に情報科の先生ではS基準、それ以外の先生でもB基準であってほしいということでした。これは情報科の先生にとっては高い基準に感じられるかと思います

が、生徒たちにとってはこのS基準を「目指している姿」がリスペクトに値するようなのです。たどたどしくても生徒に「これどうやってやるの？」など聞きながら、一生懸命やっている大人たち。興味を持ち、一生懸命やろうという姿こそが、高校生から非常に身近であり、相談できる大人であることを示せるのではないかと思います。実際に、S基準になっているという必要はないかもしれませんが、そこを目指していない、目指す気持ちもないという大人が、一番残念に見えているということだと思います。生徒の未来を考えるならば、情報科の先生はSNSの影の部分ばかりを指導する先生であってはいけない、「光」をちゃんと伝えられる、そういう大人になっていかなければいけないのだということです。使ってみて、生徒と先生が一緒に対応を考え、これからもどんどん社会を作っていくのが良いと思います。

## 8. おわりに

この取組は教育委員会の特別な組織でたまたま最初に実践したのですが、実は学校の授業でもやれる話だと私自身気づきました。

問題解決学習でもあり、協働学習でもあり、アクティブ・ラーニングでもあります。ちょうど今求められている授業のスタイルそのものではないでしょうか。高校生からどんどん課題をあげさせて、授業に取り組めたらいいのではないかと思います。情報科の先生には特に、生徒に寄り添い、一緒になってより良い情報社会を作っていきたいと思います。

